



書とつかず離れずの半生

とよた 豊田市長(愛知県) 鈴木公平
Kohei Suzuki

蘭亭叙(序)

王羲之(307~365)。晋代の書家で官名を右軍將軍、書聖といわれる)について、書に興味のある人なら誰もが知っておられましょう。蘭亭叙(序)は28行、全文324字、王羲之47歳の時の作と伝えられ、書道史上屈指の劇跡といわれています。

東晋の永和9年(353年)、王羲之は山陰の蘭亭(浙江省紹興県)に当時の名士41人を招いた曲水の宴での詩集の序文の草稿を書いたといわれています。逸話によれば真跡は、王羲之の書を崇高した唐の太宗が苦心の末に入手し、その死後遺命により昭陵に随葬されたといういわく付きのもので、当時の中国では国宝以上の貴重なものとされていました。しかし、完全複製された当時の臨本が残されており、なんとこれが展示されました。それも東京でしたからこれはどうしても見なければいけません。それは平成20年7月、江戸東京博物館で開催された「北京故宮書の名宝」展においてでした。太宗皇帝が唐代最高の工匠の1人、馮承素に複製させたといわれる傑作「八柱第三本」と呼ばれる蘭亭叙(序)を目の当たりにすることができました。やつと実物に巡り合えたという感動と、「あっそうか、これ

とくじの書の(書)の遊び

さて、気まぐれの書とのふれあいは、その後長く続くことになりました。時に書き、時に鑑賞し、時に読む、その時々々の気の向くままの自由な時間が、まことに貴重な気分転換となったのです。文字とは本当によく出来ているとつく



図録掲載の名跡を鑑賞する筆者

なんだ」という普通感覚が交錯し、表現しがいなことを思い出します。

不純な動機

最初に王羲之の名前を知ったのは高校生の時でした。もう50年以上も昔のことですが、選択科目で比較的楽に単位が取れると友人に誘われ、書道史の授業を受けた時のことでした。その当時はとりたてて関心を持つこともなく、単に記憶の隅に残されていた程度であったと思います。そしていつとはなく書道史のことは忘れていきました。

それが40年近く前のこと、久しぶりに再会した高校時代の当の友人から今も書の勉強を続けている、君はどうしているか、と問われたことがきっかけとなって、結局紹介を受けた師匠の元に通うことになったのです。ですから、まことに適当な動機と余暇の時間つぶし程度のもりで書とかかわるようになったのでした。



江戸東京博物館「北京故宮書の名宝」展チラシ

他人の尻にくっついていたらだと時間が過ぎていたある時、転機が訪れました。文部省認定の書写技能検定を受けてみないかと誘われたのです。また他人に声を掛けてもらっての新たな一歩へとなったのでした。今ごろになって、自分でもあきれていますが、とにかく実はそれがその後も書とのつきあいが続いていく契機となったのでした。この審査試験ではさまざまな実技と、これまたさまざまな理論問題に答えなければなりません。そしてやっぱり問題の一領域に書道史がありました。書道史はそのまま文字の歴史であり、独特の文字文化を生み出し、はぐくんでいった歴史でもありました。それを改めて知ることになったのでした。

「書、というものは運動ともいうし、形ともいえるし、息だともいえる。」

手島右卿先生書話集より。



ある自治区(町会)集会所の拙作

わが国において文字が紙に書かれ、その時期と人物が分かるのは、聖徳太子の「法華義疏」が最古の遺例といわれますが、その後、今も至宝として残る名跡が数多く残されています。特に漢字から日本独特の平仮名が生み出され、王朝文学の興隆と相まって洗練された仮名美の世界が出現していきました。文字を書くことで美を追求し、芸術としてその価値を見出した書道史の変遷をたどると、変化に富み、時代を映してまさに興味は尽きません。現代は電話による音声通話からEメールへと移るなど、さまざまな電子的通信手段へと変化し、一般化しました。文字を手書きし、意思を伝えることが、日常生活の場からほとんど消えてきています。それだけに